

タイトル	ヴェルネルの法則に見られる記述の多様性とその原因について
著者	上野，誠治
引用	北海学園大学人文論集，44：1-28
発行日	2009-11-30

ヴェルネルの法則に見られる記述の多様性と その原因について*

上 野 誠 治

0. はじめに

英語はゲルマン語派に属する 1 言語であるが、そのゲルマン語派がインド・ヨーロッパ祖語から分離し始めたのは紀元前 2000-1200 年頃と推定されている。そのゲルマン語派はさらに北、東、西の 3 グループに分岐するが、英語はその中の西ゲルマン語派に属する(図 1 参照)。これらゲルマン語派の言語をインド・ヨーロッパ語族に属する他の言語から区別する特徴の 1 つに、グリムの法則 (Grimm's Law) と呼ばれる組織的な閉鎖音の推移がある。しかし、この法則には説明できない例外がいくつかあり、グリムを含め当時の言語学者を悩ませたが、1875 年、デンマークの言語学者ヴェルネル (Karl Verner) が、インド・ヨーロッパ祖語の強勢の位置との関連を明らかにした。それが後にヴェルネルの法則 (Verner's Law) と呼ばれるようになったものである。しかし、ヴェルネルの法則に関する様々な記述を見ると、実際には、それはグリムの法則ほど明瞭なものではない。必ずしも自明とは思えないのである。

グリムの法則については、(1) のような図式で記述されることが多いのに対して、ヴェルネルの法則は概略、「直前の母音に強勢がない時、有声化す

* 本稿は、2009 年 10 月 4 日に開催された日本英文学会北海道支部第 54 回大会 (於 北海道教育大学函館校) で発表した内容に一部加筆修正したものに基づいている。発表の機会を提供して頂いた大会企画委員会に感謝申し上げたい。

る」のように、文章の記述によって紹介されることが多い¹⁾。それがヴェルネルの法則を不明確なものにしてしまう原因の1つであることは、拙論(2001)で論じたとおりである。

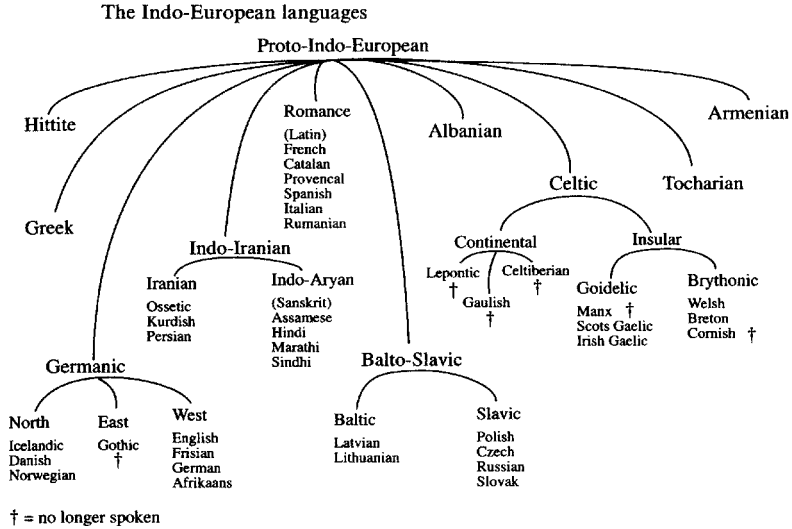


図1 インド・ヨーロッパ語族 (McMahon 1994: 3)

(1) Grimm's Law (Cf. Pyles and Algeo 1993)

PIE bh, dh, gh → Gmc b, d, g
 PIE p, t, k → Gmc f, θ, x(h)
 PIE b, d, g → Gmc p, t, k

本稿では、ヴェルネルの法則に関する様々な記述を取り上げ、法則の正体をより明確なものにするとともに、不正確な知識に基づくと思われる記述

¹⁾ 文章ではなく図示する形で紹介しているものに、Brinton and Arnovick (2006), Crystal (1997), Campbell (2004), 松浪ほか (1983), 小野・中尾 (1991), Pyles and Algeo (1993) などがある。

や、誤解を与えかねない記述の原因がどこにあるのかを論じる²⁾³⁾。

その前提として、拙論（2001）で論じたように、ヴェルネルの法則とは、(2)に示される4つの案の中のA案であると想定する。すなわち、ヴェルネルの法則とは、「グリムの法則の結果生じた無声摩擦音がある条件の下で有声化して、有声摩擦音となる変化」を述べたものである。

(2)

グリムの法則		ヴェルネルの法則		
無声閉鎖音		無声摩擦音	有声摩擦音	有声閉鎖音
p	→	f	→	β
t	→	θ	→	ð
k	→	x	→	ɣ
		A 案		
		B 案		
		C 案		
		D 案		

（拙論（2001：71）一部改変）

1. A 案：無声摩擦音→有声摩擦音

本節では(2)のA案について検証する。この案はヴェルネルの法則につい

²⁾ ヴェルネルの法則を記述するにあたっては、文献によって様々なフォントが用いられている。この点も、記述における問題点の1つではあるが、以下では、原著で用いられているフォントをそのまま用いて検証していく。また、インド・ヨーロッパ祖語やゲルマン基語などには推定形であることを示す星印(asterisk)が付されている場合とそうでない場合が混在しているが、引用する際は基本的に原著の表記法を優先している。

³⁾ 本稿では、どのような条件下で当該の有声化が起こるのかという点については特に触れないことにする。

て、筆者が当然期待する記述になっているが、B案、C案、D案がどのような点で誤解を与える記述となっているかを明確にするために、次節以降の議論も念頭に置いて、それぞれの記述について、一部問題点も含めて検証したい。

(3) 松浪ほか (1983: 156)

グリムの法則によれば印欧基語の無声閉鎖音 p, t, k はゲルマン語で無声摩擦音 f, θ, x になったが、有声摩擦音 β, ð, γ になることがあった。(中略)そこで印欧基語において無声摩擦音の直前の母音に主なアクセントが置かれていない時には、ゲルマン語の無声摩擦音は有声摩擦音になったと考えられる⁴⁾。

松浪ほかは、(3)に示すように、明確に無声摩擦音 (voiceless fricative) が有声摩擦音 (voiced fricative) になる、と述べている。また、その具体例として彼らは、次の(4)を挙げている。この個所だけでは、あたかもインド・ヨーロッパ祖語 (Proto-Indo-European, PIE) の無声閉鎖音 (voiceless stop) の p, t, k がゲルマン語 (Germanic, Gmc) で有声摩擦音の β, ð, γ ヘワンステップで変化するようにも見えるが、(3)の記述を考慮すれば、(4)における音変化はグリムの法則とヴェルネルの法則が順に適用した結果の音変化であることがわかる。

(4) 松浪ほか (1983: 156 関連部分のみ)

(i) PIE p > Gmc β

Skt *saptá*, Goth *sibun* (b は [β]), OE *seofon* (=seven)

(ii) PIE t > Gmc ð

Skt *pitá*, Goth *fadar* (d は [ð]), OE *fæder* (WGmc で [ð] >

⁴⁾ 以下、引用の中の下線部や太字は筆者による。一部、原著における下線部や太字も含まれる。

[d]) (=father)

(iii) PIE $k > Gmc \gamma$

Skt śvaśrūs (2 番目の ś は k が口蓋化したもの), OE sweġer
(=mother-in-law)

ここでは、(i) から (iii) にあるように、インド・ヨーロッパ祖語の p , t , k という無声閉鎖音が (グリムの法則による無声摩擦音への音変化を経て) ゲルマン語において β , δ , γ という有声摩擦音に変化したことが図示されていると考えるべきであろう。

注目すべきは、ゴート語(Gothic)の例として挙げられている *sibun* について、語中の b の発音が有声閉鎖音 (voiced stop) の $[b]$ ではなく有声摩擦音の $[\beta]$ であることを指摘している点である。同様に、ゴート語の *fadar* についても、語中の d が有声摩擦音の $[\delta]$ の発音であることが指摘されている⁵⁾。この指摘があるからこそ、松浪ほかは、ヴェルネルの法則を「無声摩擦音から有声摩擦音への変化」と捉えているのである。

ただし、問題点がないわけではない。1 つ目は、古英語の例 *seofon* については *sibun* に関するような説明が一切加えられていない点である。古英語の f や s は母音に挟まれたり、母音と有声音に挟まれると有声音の $[v]$, $[z]$ となる (大概ほか (2001: 148) 参照)。そうすると、この *seofon* は $[p] \rightarrow [f] \rightarrow [\beta]$ ではなく $[p] \rightarrow [f] \rightarrow [v]$ という音変化を示す例になってしまう恐れがある⁶⁾。しかし、拙論 (2001: 76 ff) で指摘したように、*seofon* の f $[v]$ は、ヴェルネルの法則で生じた有声摩擦音 $[\beta]$ が $[v]$ と併合した結果であり、ヴェルネルの法則の適用以後の変化であると考えられる。

また、2 つ目として、(iii) の例として挙げられている古英語の *sweġer* には、語中の g に、その文字の発音が半母音 (semi-vowel) の $[j]$ であること

⁵⁾ 拙論 (2001: 65 脚注) で言及したもの以外に、高津 (1992: 230), 吉田 (2005: 5) でも指摘されている。

⁶⁾ $[p] \rightarrow [f]$ の変化はグリムの法則による音変化である。

を示す補助記号 (diacritic) が付けられている。そうすると、この sweȝer の例は、[k]→[χ]→[ʏ]ではなく[k]→[χ]→[j]という音変化を示すことになるので、このままでは不適切であると言わざるを得ない⁷⁾。古英語では、g が前母音に挟まれている時などに[ʏ]→[j]となることを付記すべきであり、ここでの音変化が[k]→[χ]→[ʏ]→[j]であることを確認すべきである⁸⁾。

以上の議論が正しければ、これら古英語に特有の変化、すなわち[β]→[v]や[ʏ]→[j]は「その後の変化」であって、当然ヴェルネルの法則からは切り離されるべきものである。

次に、宇賀治 (2000: 12) の記述を見てみよう。

(5) 宇賀治 (2000: 12)

Rask も Grimm も上記第1段階の推移で、印欧祖語の p, t, k が s とともに、ゲルマン語派では常に期待どおりに f, þ, h, s へ推移するとは限らず、語中と語末で有声化して b, ð, g, z (古英語ではさらに変化して f [v], d, g, r となる) 場合があることに気づいていた。(中略) すなわち、ゲルマン祖語で問題の子音は、それに先行する母音にアクセントがあれば期待どおりに無声摩擦音 (voiceless fricative [spirant]) へ推移するが、アクセントがなければ有声摩擦音が現れる。これをヴェルネルの法則 (Verner's law) と呼ぶ。

(5)における b, g は(4)における β, ʏ に相当する。ここでも、無声摩擦音が有声摩擦音になる変化がヴェルネルの法則であると明確に述べられている。また、先述した[β]→[v]の変化に関する指摘もあり有用である。

⁷⁾ [k]→[χ] の変化はグリムの法則による音変化である。

⁸⁾ もちろん、その確認は読者の側の責任かもしれないが、松浪ほか (1983) は研究書というより『事典』であるから、その程度の配慮はあってもいいと思われる。

次は Baugh and Cable (2002 : 22) を検討する。

(6) Baugh and Cable (2002 : 22)

It was noted that between such a pair of words as Latin *centum* and English *hundred* the correspondence between the *c* and *h* was according to rule, but that between the *t* and *d* was not. The *d* in the English word should have been a voiceless fricative, that is a *þ*. In 1875 **Verner showed that when the Indo-European accent was not on the vowel immediately preceding, such voiceless fricatives became voiced in Germanic. In West Germanic the resulting *ð* became a *d***, and the word *hundred* is therefore quite regular in its correspondence with *centum*.

太字部分が示すように、ここでは無声摩擦音 (*þ*) がゲルマン語で有声化するとだけ述べられているが⁹⁾、挙げられている例から考えても、有声摩擦音 (*ð*) になると解釈して構わないと思われる。ただし、ラテン語の *centum* と英語の *hundred* を比べた時の音の対応は [t] : [d] である。しかし、無声摩擦音が有声化した結果が有声摩擦音であるとすれば、[t] : [ð] であるはずである。このことは、その直後で述べられている「西ゲルマン語派では、生じた ð は d となった」という説明でも裏付けられている¹⁰⁾。したがって、ここでの音変化は [t] → [θ] → [ð] → [d] であり、ヴェルネルの法則による変化は [θ] → [ð] の部分のみである。この点に関して、マルティネ (2003 : 95) も、次のように説明している。

(7) マルティネ (2003 : 95)

古いアクセントが語の第一音節に固定したアクセントに置き換えら

⁹⁾ *þ* は文字であって発音記号ではないが、[θ] を指すものと解釈される。

¹⁰⁾ Trask (2007 : 120) にも同様の指摘がある。

れる以前の段階で、*p, *t, *k, *k^wに起因する無声摩擦音[Φ , θ , χ , χ^w]及びスー音 *s は、これらが語頭にない場合でその直前にアクセントがない場合に、有声化してそれぞれ[β , δ , γ , γ^w]となった。したがって、これらのうち前の四者は *b, *d^h, *g^h, *g^{hw} の結果と合一した。この結果、*kmtóm「100」はまず[χ unθám]となった。語頭の[χ -]は無声のままであったが、語中の[- θ -]はアクセントの直後ではなく直前にあったため有声化して[- δ -]となり、[-n-]に隣接していたため硬化して[-d-]となった。アクセントが第一音節に移ると語尾の[-am]は脱落した。語頭の[χ -]は普通[h-]となる。以上より hund が得られ、これはこのままの形で、あるいは合成語 hundred の一部として実証される。この一連の変化の定式化を行ったのはデンマーク人 Karl Verner であり、そのためこれはヴェルナーの法則の名で知られている¹¹⁾。

ここでは、有声摩擦音[δ]として[δ]のフォントが用いられているが、グリムの法則が適用した結果生じた無声摩擦音[θ]がヴェルネルの法則によって有声化し、さらに硬化 (hardening) して[d]が生じたとしている。つまり、音の変化としては[t]→[θ]→[δ] (= [δ]) →[d]ということになる。決して、インド・ヨーロッパ祖語の[t]が直接[d]に変化したわけではないのである。

これと関連してさらに吉田 (1996: 113-114) を見てみよう。

¹¹⁾ [p] に起因する無声摩擦音が [f] ではなく [Φ] となっている点は注目に値する。グリムの法則で、無声両唇閉鎖音 (voiceless bilabial stop) の [p] が摩擦音化したとすれば、無声両唇摩擦音 (voiceless bilabial fricative) の [Φ] である方が無声唇歯摩擦音 (voiceless labiodental fricative) の [f] よりむしろ自然である。また、それがヴェルネルの法則によって有声化し有声両唇摩擦音 (voiced bilabial fricative) の [β] に変化したと考えれば辻褄も合う。この点に関しては、稿を改めて議論するつもりである。

(8) 吉田（1996：113-114）

たとえば、古英語の brōpor 「兄弟」と fæder 「父」のあいだにみられる þ と d の違いは、brōpor の場合はヴェルネルの法則がはたらいたときにアクセントは直前にあったが（対応するギリシア語の phrátēr を参照。印欧祖語のアクセントを書かれた記録のなかに残している代表的な言語は、ギリシア語とサンスクリット語である）、fæder の場合はアクセントが後ろにあったことによる（対応するギリシア語 pētēr を参照）。

印欧祖語	*bhrátēr	→	*brōpēr	→	古英語	brōpor
印欧祖語	*pētēr	→	*fapēr	→	*faðēr	→ 古英語 fæder
			↑		↑	
			グリムの法則		ヴェルネルの法則	

この中で、古英語 fæder に関しては A 案に沿った説明と言えるが、「þ と d の違い」という記述には問題がある。ヴェルネルの法則が適用した場合と適用しなかった場合の違いを反映したものと考えられているように思われるが、前述したように古英語 brōpor の þ は[ð]の発音である。古英語 fæder と brōpor では、問題の子音は両方とも有声音となり、第3節で触れるギルマイスター（2000：13）と同じ問題をはらんでいるように思われる。したがって、ここでは、次のような記述にすべきであったと思われる。

- (9) *bhrátēr からグリムの法則が適用された結果生じた *brōpēr の þ はその直前の母音に強勢があるためヴェルネルの法則は適用されずに無声摩擦音[θ]のままだったが、その後、古英語では母音に挟まれるなどした場合、有声化して[ð]となった。

以上、松浪ほか（1983）、宇賀治（2000：12）、Baugh and Cable（2002：22）、マルティネ（2003：95）、吉田（1996：113-114）のヴェルネルの法則

に関する記述を見てきた。記述にまったく問題ないとは必ずしも言えないかもしれないが、いずれもヴェルネルの法則が「無声摩擦音から有声摩擦音への変化」としている点では一致している。

2. B 案：無声摩擦音→有声閉鎖音

前節では、筆者が想定するヴェルネルの法則に沿った記述をしている文献を取り上げ検証したが、本節では、その A 案よりも広く「無声摩擦音から有声閉鎖音への変化」として捉える立場の见解を検証していく。まず、町田ほか(1997:228)の説明を見てみよう。

(10) 町田ほか(1997:228)

ベルネルの法則によると、印欧祖語の/p, t, k/は、一旦グリムの法則の記述するとおり/f, θ, h/に変化した後、有声化する環境において/b, d, g/に変化したが、アクセントのある母音の直後に位置する場合には有声化しなかった。例えば、印欧祖語の*pətēr は、ゴート語では fadar であって、語頭の/p/はグリムの法則の通り/f/になっているが、語中の/t/は、直前の母音にアクセントがなく、母音間という有声化の環境にあるので、/θ/ではなく/d/で現れている。

拙論(2001)でも指摘したが、町田ほかの決定的な誤りは、ゴート語 fadar の d の発音を/d/と捉えている点にある。彼らは/θ/が/d/に変化したと述べており、それがヴェルネルの法則であると考えているように思われる。彼らは、ヴェルネルの法則の説明の直前でグリムの法則を説明しているが、そこでは、/θ/を無声摩擦音、/d/を有声閉鎖音としているので、この/θ/→/d/も無声摩擦音から有声閉鎖音への変化と見て差し支えないと思われる。もし、そうだとすると、前節の A 案とは異なってくることになる。

ただし、ゴート語の音素/d/は生じる位置によって[d], [ð]という2つの異音を持ち、fadar のように母音間に挟まれるとき有声摩擦音[ð]となるか

ら、その意味では、町田ほかの記述が全くの誤りである、とは言えないかもしれない。しかし、ゴート語の例を挙げ、しかも語中の *d* がここでは [ð] を表すという指摘がないことを考えると、単に *fadar* の綴りを根拠に無声摩擦音から有声閉鎖音への変化を捉えたと考えざるを得ないと思われる。また、「音素は各個別言語が持っている音声に関する知識¹²⁾」であるから、複数の言語における「音」を比較する場合は、そもそも ‘//’ を用いた音素表記は不適当であろう。

次に Fromkin et al. (2007 : 481) を見てみる。彼らは具体例を挙げていないが、町田ほか (1997) と同様、ヴェルネルの法則によって無声摩擦音が有声閉鎖音に変化したと捉えているようである。Fromkin et al. のように版を重ねている概説書にもかかわらず、同じ説明を繰り返している点は不可解である。(11) のような記述と前節で取り上げた A 案ではあまりにも食い違うと言わざるを得ない。

(11) Fromkin, Rodman and Hyams (2007 : 481)

He¹³⁾ formulated Verner’s Law to show why Indo-European *p*, *t*, and *k* failed to correspond to *f*, *θ*, and *x* in certain cases:

Verner’s Law: When the preceding vowel was unstressed, **f**, **θ**, **x** underwent a further change to **b**, **d**, and **g**.

次は、小泉 (1984 : 234) である。

(12) 小泉 (1984 : 234)

デンマークの言語学者 K. ベルネルは音韻法則におけるアクセントの移動に目をつけた。

¹²⁾ 郡司ほか (2004 : 71) 参照。

¹³⁾ Karl Verner を指す。

- (A) 印欧基語 (B) 前ゲルマン語 (C) (D) ゲルマン語
 (1) *bhrá:ter > *brá:θer > > *bró:θar
 (2) *pəté:r > *faθé:r > *fadé:r > *fáder

すなわち、印欧基語から前ゲルマン基語においては、グリムの法則通り(B)の段階で $t \rightarrow \theta$ という摩擦化の変化が発生した。そして、(C)の段階で、(1)アクセントの後の θ はそのままであったが、(2)アクセントの前の $\theta > d$ に変化した、と考えた。

小泉は、ヴェルネルの法則によって無声摩擦音の θ が有声閉鎖音の d に変化したことを述べていると思われるが、前節で取り上げたマルティネ(2003:95)は一連の変化を $[t] \rightarrow [\theta] \rightarrow [\delta] \rightarrow [d]$ と捉えていた。もしマルティネの主張が正しいとすれば、小泉の説明は $[\delta] \rightarrow [d]$ という、ヴェルネルの法則の適用以後の硬化の現象をも含めているところに問題があるように思われる。これは、本来ヴェルネルの法則からは切り離されるべき現象である。また、一見、小泉と同じような説明をしているものに中島(1979:89)がある。

(13) 中島(1979:88)

以上の対応の中(1)の Gmc f, p, h は s とともに、ときに有声摩擦音(b, d, g, z)になることがある。それはこれらの子音が語中にあって、その語のアクセントがそれぞれの子音に先立つ音節にないときである。例えば L *pater* と OE *fæder* (‘father’) を比較すると $p-f$ の対応はグリムの法則で説明がつくが、 $t-d$ の対応は $t-p$ という規則にそむく。しかしこれは IE 本来のアクセント法により Gmc 以前においてアクセントが、後の音節にきて **faþér* であったため p が有声化し、Gmc で **fader* として現れ、これが OE *fæder* に発達したと説明される。このアクセントの位置による子音変化が Verner’s Law と呼ばれるものである。

後半の説明における、「*p*が有声化し、Gmc で **fader* として現れ、これが OE *fæder* に発達した」との記述は、[θ]→[d]の変化を記述しているようにもとれるが、説明の前半で、ヴェルネルの法則によって有声摩擦音になることが示唆されているので、それはあたらないと思われる。「*p*が有声化し(δとなる)」というのが中島の考えるヴェルネルの法則であると思われる。*p*すなわち[θ]の有声化([δ])と硬化([d])を経てゲルマン基語の **fader*、さらには古英語の *fæder* へと連なるのである。

最後に、この B 案を採用すると、無声音が有声音に変化するのと同時に、摩擦音が閉鎖音に変化することを認めなければならない。しかし、音韻規則の観点から言えば、同時に 2 つの素性(feature)が変化するというのは、あまり望ましいことではないように思われる。拙論(2001)の調査では、この B 案に沿った記述が他の 3 案より数が少ない理由のひとつとして、この音韻論的な不適切さも挙げられるかもしれない。

3. C 案：無声閉鎖音→有声摩擦音

本節では、C 案を検討する。まず最初に、寺澤(1997:1256)を取り上げる。

(14) 寺澤 (1997:1256)

Gmc では IE の *-p-* は Verner's Law で有声摩擦唇音の *-b-* に変わり、*-t-* は序数詞 Gmc **sebunða-* (<IE **sepmtó-* (子音重複のため最初の *t* を消失)) の影響で消失した。

ここでは、ヴェルネルの法則によってインド・ヨーロッパ祖語の *p* が *b* すなわち *β* に変わったという趣旨の説明がなされている。単純に受け止めれば、*p* → *β*、すなわち無声閉鎖音から有声摩擦音への変化と解釈できるが、同書の別の箇所には、次のような記述(すなわち、無声摩擦音 *p* から有声摩擦音 *θ* への変化)もあることから、(14)は *p* がグリムの法則で無声摩擦

音 *f* に変わった後、ヴェルネルの法則によって有声化し、有声摩擦音 *β* に変化したと善意に解釈する必要がある。

(15) 寺澤 (1997: 484-485)

◇ OE *fæder* — *brōþor* ‘BROTHER’ の語間子音 */d/* — */ð/* の対応は Verner’s Law により説明がつく。Grimm’s Law によれば IE *t* は Gmc *p* に対応するが、OE *fæder* と *brōþor* の場合は IE においてそれぞれ **pətér-*, **bhrāter-* のようにアクセントの位置が異なっており、前者のように直前の音節にアクセントを持たない場合は Gmc *p* は有声化して *ð* (OE *d*) となり、逆に後者のように直前の音節にアクセントを持つ場合はこの有声化が阻止された (ただし *p* は OE で是有声音の間で有声化した)。Gmc *ð* は WGmc では *d* となる。

次は、田中ほか (1982: 246) である。

(16) 田中ほか (1982: 246)

これは不規則な変化であり、グリムは例外としたが、共通基語のアクセントの位置によって *p*, *t*, *k* は *β*, *ð*, *ɣ* として現れることがあるということを、ヴェルナーが証明した。これをヴェルナーの法則という。

これを読む限り、ヴェルネルの法則とは「*p*, *t*, *k* という無声閉鎖音から *β*, *ð*, *ɣ* という有声摩擦音への変化」と解釈できる。同様に、Miller (1996: 10) も同じような記述になっている。

(17) Miller (1996: 10)

... Verner’s Law, which said that **if the PIE voiceless stop is not initial, or is not immediately followed by a stressed vowel, then it becomes a voiced fricative** in the Germanic languages.

代名詞 *it* は the PIE voiceless stop を指すと考えると、ここでも無声閉鎖音から有声摩擦音への変化がヴェルネルの法則であると述べていることになると思われる。次はどうであろうか。

(18) ギルマイスター（2000：13）

古インド語	bhrā́ta	古英語	brōþor	印欧語	*bhráter
古インド語	pita	古英語	fæder	印欧語	*pətér
古インド語	satóm	古英語	hund	印欧語	*k'mtóm

閉鎖音 *p*, *t*, *k* は摩擦音 *f*, *b*, *ɣ* への途上で有声の異音 *b*, *d*, *g*（同様に摩擦音）を発達させたらしく、それらがつぎに印欧語 *bh*, *dh*, *gh* からの結果と一致した。したがって印欧語で第1アクセントが直前に来ない時には、ゲルマン祖語で *f*, *b*, *ɣ* の代わりに有声摩擦音 *b*, *d*, *g* が現れる。

ここでは、有声摩擦音として横棒のない *b*, *d*, *g* というフォントが用いられているが、有声摩擦音と明確に述べられている点に注目したい。ただし、ギルマイスターが挙げている例については注意を要する。古英語の *fæder* や *hund* はインド・ヨーロッパ祖語の *t* が、その直前の母音に強勢がないためヴェルネルの法則によって「有声摩擦音 *d*」すなわち *ð* に変化したとの説明であるが、第1節で見たように¹⁴⁾、西ゲルマン語派に属する古英語では、この *ð* が「有声閉鎖音 *d*」に変化するのである。また、古英語の *brōþor* は、対応するインド・ヨーロッパ祖語 **bhráter* で、*t* の直前の母音に強勢があるためヴェルネルの法則は適用されない。その結果として、有声化されずに無声摩擦音の *θ* のままとなるはずである。つまり、ギルマイスターが挙げている3例のうち、第1例はヴェルネルの法則が適用されない場合

¹⁴⁾ 寺澤（1997：484-485）参照（本文(15)）。

で、残りの 2 例はヴェルネルの法則が適用される場合である。その違いは無声音と有声音の対比となるはずであるが、古英語の brōþor の þ は母音に挟まれているため、実際の発音は[ð]であり有声摩擦音である。そうすると、摩擦音と閉鎖音の違いはあるものの、ここで挙げられている古英語は 3 例とも当該の子音は有声音となり、一見ヴェルネルの法則の適用と非適用の違いが見えにくくなってしまっているようである。その意味で、この 3 例はヴェルネルの法則を記述する具体例としてはあまり良くないように思われる。

その点、O'Grady and Archibald (2000 : 305) はゴート語を用いて次のように例示している。

(19) O'Grady and Archibald (2000 : 305)

PIE	Sanskrit	Grimm's Law	Verner's Law	Gothic
*t	bhrātā	*t > θ	—	[bro:θar] 'brother'
*t	pitā	*t > θ	θ > ð	[faðar] 'father'

O'Grady et al.はゴート語を例に挙げているが、提示しているのは発音記号のみである。ゴート語の綴りはそれぞれ broþar と fadar である。fadar については、第 1 節で述べたように、d は[ð]と発音される。発音記号のみの例示はゴート語におけるこのような綴りと発音の不一致に起因する誤解を回避する狙いがあったのかもしれない。また、broþar については、古英語と異なり þ は母音に挟まれていても有声化せず無声音 ([θ]) のままである¹⁵⁾。いたずらに、「母音に挟まれると þ は有声音になる」という古英語の知識があると、綴り字だけではゴート語の場合にも有声音と取られかねない。その意味で、彼らの発音記号による例示は賢明であったと思われる。

以上、本節ではヴェルネルの法則を「無声閉鎖音から有声摩擦音への変

¹⁵⁾ コツィオル (1977 : 217), 吉田 (2005 : 5) 参照。

化」とする C 案について検証してきた。ここで指摘された問題の他に、この案では、たとえばインド・ヨーロッパ祖語の *pōtēr* がゲルマン基語で *faðēr* となることを説明する場合、「語頭の p はグリムの法則で f になり、t はヴェルネルの法則 C 案で ð となる」と述べなければならなくなる。その場合、何故 t がグリムの法則の適用を受けないかを別に説明しなければならないという問題が生じるであろう。また、そもそも C 案の前半部分はグリムの法則と重複するので余剰的 (redundant) であり、その点も問題である。また、B 案の場合と同様、C 案でも 2 つの素性の変化が含まれているので、その意味でも問題がある。

4. D 案：無声閉鎖音→有声閉鎖音

本節では、可能性としては最も広い「無声閉鎖音から有声閉鎖音への変化」について検証する。

(20) 小野 (1980: 10)

印欧語の強勢が無声閉鎖音の後にあるとき（たとえば **pōtēr*）は、その無声閉鎖音はゲルマン語においては有声閉鎖音となる —**pōtēr* > **fadēr* > **fāder*。これを一般に‘Verner’s law’という。

ここで、小野 (1980: 10) は明確にヴェルネルの法則で無声閉鎖音が有声閉鎖音になると述べている。次の桜庭 (1982: 23)、安井 (1996: 850) も同様である。

(21) 桜庭 (1982: 23)

すなわち IE p, t, k は上記の場合には f, th(b), h とはならないで、それぞれ b, d, g になるというのである。これが「フェルネルの法則」(Verner’s Law) と呼ばれるものである。

(22) 安井 (1996 : 850)

ベルネルの法則は、直前に強勢をもたないインド・ヨーロッパ祖語 (PIE) の無声子音が、ゲルマン祖語 (PGmc) では有声化する、という規則性をとらえたものである。一例をあげると、[PIE]**pətér* (*は推定形を示す) の語中の *t* が古期英語では *fæder* に見るように *d* に変化しているが、それは、直前に強勢をもたないインド・ヨーロッパ祖語の *t* が、ゲルマン諸語の 1 つの古期英語では、有声化されたからである。

安井 (1996 : 850) の場合、インド・ヨーロッパ祖語の **pətér* と古英語の *fæder* を比較して、*t* が *d* に変化していることを指摘しているが、この記述では *t* → *d* の変化をもたらしたものがヴェルネルの法則であると述べているように受け取られる恐れがある。もしそうだとすると、やはり誤解を与えかねない記述になっていると言わざるを得ない¹⁶⁾。次に Crystal (1997 : 330) を見てみよう。

(23) Crystal (1997 : 330)

Or again, the word for ‘father’ was *fadar* in Gothic and *pitā́* in Sanskrit. The change from [p] to [f] was regular, but **why did the [t] become [d]**, when according to Grimm’s law it should have been [θ]?

¹⁶⁾ 荒木・安井 (1992 : 1559) でも同様の記述がされている。そこでは、「[PIE] **pətér* → [OE] *fæder* のようなグリムの法則の例外は、このベルネルの法則で説明可能となる」と述べられている。誤りではないが、インド・ヨーロッパ祖語の無声閉鎖音が古英語の有声閉鎖音に変化することを説明する法則が、ヴェルネルの法則であると、主張しているように受け止められる可能性があるかもしれない。

Crystal はゴート語の *fadar* とサンスクリット語の *pitá* を比較して何故 [t] が [d] になったのか、と疑問を呈しているが、ここでもゴート語の *fadar* に関して d の発音を綴り字どおりに [d] としている点に問題がある¹⁷⁾。先述の通り、問題の子音は [d] ではなく有声摩擦音の [ð] である。他方で Crystal は同書の欄外に次のような図を提示している。

(24) **Verner's law**

<i>Germanic</i>		<i>Germanic</i>		<i>Later</i>
Voiceless		Voiced		<i>forms</i>
fricatives		fricatives		
(arising from Grimm's law)				
f	→	v	→	b
θ	→	ð	→	d
x	→	ȝ	→	g

ヴェルネルの法則として提示されているこの図は、無声摩擦音が有声摩擦音に、さらにその後、有声閉鎖音に変化することを示している。これは、Crystal 自信が述べている「その後の形 (Later forms)」を含めなければ A 案となるが¹⁸⁾、含めると C 案ということになる。いずれにしても、本文の説明と整合性がとれず、誤解を与えるような説明になっていると思われる。したがって、(23)の記述は単純な「無声閉鎖音から有声閉鎖音への変化」を述べているのではないかもしれない。次はどうであろうか。

¹⁷⁾ McMahon (1994 : 23) もはっきりと “Gothic *fadar* with a medial voiced /d/” と述べている。

¹⁸⁾ ただし、無声摩擦音 f が有声摩擦音 v に変化するという点は A 案になかった記述である。第 1 節で述べた古英語 *seofon* のような例が念頭にあるのかもしれない。

(25) Bambas (1980 : 43)

Other parts of Verner's Law settled a controversy involving apparent exceptions to Grimm's Law, like the words *centum* > *hundred*; *hund* should be *hunth* according to Grimm's Law, but, according to Verner's stress-pattern theory, **t became d** when the IE stress did not precede the consonant in medial position.

Bambass (1980 : 43) は Baugh and Cable (2002 : 22) 同様, ラテン語 *centum* と英語 *hundred* を比べて, 「t が d になった」と述べている。Baugh and Cable (2002 : 22) は, 第 1 節ですでに述べたように, $t \rightarrow \theta \rightarrow \delta \rightarrow d$ という一連の子音変化を想定していたが, Bambass の説明ではその途中段階が完全に抜け落ちたような記述になっている¹⁹⁾。

(26) Campbell (2001 : 91)

Proto-Indo-European	Sanskrit	Gothic	
*septém-	saptá	sibun	“seven”

Figure 4.3 Examples illustrating Verner's law

By Grimm's law, we expect the *p* of Sanskrit to correspond to *f* in Gothic, not the *b* found in this Gothic word, and given the *b* of Gothic, we would expect Sanskrit to have *bh*. Verner's law explains this exception to Grimm's law. When the Proto-Indo-European accent followed the sound in question (and it was not the first sound in the word), as seen in Sanskrit *saptá* (*á* is accented), ***p became b** in Germanic, as in the Gothic word;

¹⁹⁾ hundred に関する一連の子音変化については, マルティネ(2003 : 95) (本稿(7)) 参照。

otherwise, Grimm's law applied.

同様に, Campbell (2001: 91) はインド・ヨーロッパ祖語の p がゲルマン語派で b に変化すると述べているが, ここでも $p \rightarrow f \rightarrow \beta \rightarrow b$ という一連の子音変化から途中を飛ばして, 単に $p \rightarrow b$ としているように思われる。ゴート語の *sibun* は (4) で指摘されているように b が有声摩擦音の [β] であるとする主張が正しければ, ここでも字面だけの比較をしていると言わざるを得ない。

以上, D 案の問題点を指摘してきたが, D 案は B 案, C 案の両方で指摘された問題点を含むと同時に, 綴りに基づいた字面だけの比較をした結果と思わざるを得ない子音変化になっているように思われる。

5. 安藤 (2002: 32) の記述

本節では, 安藤 (2002: 32) を取り上げ検証する。次の (27) が安藤によるヴェルネルの法則に関する説明で, (28) がその具体例である。これは, これまでに扱った 4 案とはいずれとも異なるものである。

(27) 印欧祖語の p, t, k は[ゲルマン語では]有声音の間にあって直前の音節にアクセントがあれば, 規則どおり f, θ, h になるが, 直前の音節にアクセントがなければ, b, ð, g とする

(28)	p - b:	Skt	saptá	Goth	sibun	'seven'
	t - ð:	L	pater	Gmc	*faðēr	'father'
	k - g:	Lith	sakýti	ON	segja	'to say'
	s - z, r:	PIE	*dheusó	Goth	diuza/OE	dēor 'animal'

安藤の記述は一見, C 案か D 案に近いと思われるが, b, ð, g に変化するという説明は不可解である。このままであれば, b, g は有声閉鎖音, ð は

有声摩擦音だからである²⁰⁾。もし、第1節で指摘したように、ここでもゴート語の *sibun* の *b* の実際の発音が[β]であり、古ノルド語の *segja* の *g* が本来[ɣ]であると仮定するなら、安藤の記述はむしろC案に分類されるべきかもしれない。また、安藤は最後の例に関して、「印欧祖語の *s* は、東ゲルマン語のゴート語では (Verner の法則どおり) *z* になっている。西ゲルマン語の OE では、*z* がさらに *r* に変化している。“*r*” 音化 (rhotacism) という現象である。」と述べている。つまり、ヴェルネルの法則はあくまでも、*s* → *z* の変化を説明するものであり、その後に起こる (古英語における) *r* への変化はヴェルネルの法則とは別物である、ということである。にもかかわらず、それを(28)の中に含めて具体例として提示した点は問題があろう。整合性を取って提示するなら、次のようになるのではないと思われる。ただし、ヴェルネルの法則の具体例として提示するのであれば、*b*, *d*, *g*, *r* への「その後の変化」は切り離されるべきと考える。

- (29) *p* - β, *b*
t - ð, *d*
k - ɣ, *g*
s - *z*, *r*

6. ま と め

本稿は、ヴェルネルの法則が文献の中で様々な形で記述されている事実を出発点とし、拙論 (2001) の研究に基づき、ヴェルネルの法則とは「無声摩擦音から有声摩擦音への変化」であることを前提に議論を展開した。その上で、個々の記述を検証しながら、ヴェルネルの法則の正体がいった

²⁰⁾ ギルマイスター (2000: 13) (本文(18)) は、有声摩擦音として横棒のない *b*, *g* のフォントを用いていたが、安藤の説明の中には、特に *b*, *g* が有声摩擦音であるということは一切言及されていない。

い何なのかを考察し、その過程で浮かび上がってきた記述の多様性の原因となる共通の問題として以下のような点があることを指摘した。

(30) a. ゴート語の発音に対する不正確な知識。

(例) *fadar* [faðar], *sibun* [siBun], *broþar* [bro:θar]

母音に挟まれた *d*, *b* はそれぞれ有聲摩擦音の [ð], [β] である。

他方, *þ* は母音に挟まれていても無聲摩擦音 [θ] である。

b. 古英語の発音に対する不正確な知識。

(i) 古英語の *þ*, *f* は母音に挟まれると有聲音の [ð], [v] になる。

(例) *broþor* [bro:ðor], *seofon* [seovon]

(ii) ゲルマン基語の有聲摩擦音 [ð] は、西ゲルマン語(古英語)で硬化して有聲閉鎖音 [d] に変化する。

(iii) 古英語では、8 世紀に有聲摩擦音 [β] が有聲閉鎖音 [v] に変化する。

(例) *seofon*

c. ラテン語の *centum* と英語の *hundred* を比較するような時、途中の子音変化を無視して、表面的に有聲化した点(この例では、*t* → *d*)のみを取り上げて、それがヴェルネルの法則であるかのような説明をしている²¹⁾。

²¹⁾ 補足すると、Jespersen が指摘した「英語におけるヴェルネルの法則 (Ver-ner's Law in English)」と本稿で取り上げている本来の「ヴェルネルの法則」の混同がそのような表面的な比較の原因になっているとも考えられる。前者は 15 世紀から 17 世紀にかけて、英語において起こったヴェルネルの法則に

参考文献

- 荒木一雄, 安井 稔(編)(1992)『現代英文法辞典』三省堂.
- Aronoff, Mark and Janie Rees-Miller (eds.) (2001) *The Handbook of Linguistics*. Blackwell.
- 安藤貞雄(2002)『英語史入門』開拓社.
- Bambas, Rudolph C. (1980) *The Origin and History of The English Language*. University of Oklahoma Press. (鈴木榮一, 佐藤修二(編注)(1981)『英語の歴史』金星堂.)
- Bammesberger, Alfred (1992) “The Place of English in Germanic and Indo-European.” In Hogg (ed.) (1992).
- Barber, Charles (2000) *The English Language: A Historical Introduction*. Canto Edition. Cambridge University Press.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (2002) *A History of The English Language*. Fifth Edition. Prentice Hall.
- Bright, William (ed.) (1992) *International Encyclopedia of Linguistics*. Volume 2. Oxford University Press.
- Brinton, Laurel J. and Leslie K. Arnovick (2006) *The English Language: A Linguistic History*. Oxford University Press.
- Brook, G. L. (1958) *A History of the English Language*. André Deutch. (石橋幸太郎, 中島邦男(編注)(1973)『(英文)ブルック英語史』南雲

類似した現象である。また、次のような一般化による現代英語への適用もよく見られ、英語の学習には有用であるが、その単純な「無声子音：有声子音」の対立を本来のヴェルネルの法則の記述に持ち込んでではないと考える。

(i) 安藤(2002: 33)

この Verner の法則は、「アクセントが子音[f, θ, s, ks]の直前でない場合、その子音は有声化する」と一般化するならば、現代英語の「無声子音：有声子音」の対立を説明することができる。

堂.)

- Burgess, Anthony (1992) *A Mouthful of Air*. Vintage.
- Bussmann, Hadumod (1996) *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. (Translated and edited by Gregory Trauth and Kerstin Kazzazi) Routledge.
- Campbell, George L. (1991) *Compendium of the World's Languages*. Volume 1. Routledge.
- Campbell, Lyle (2001) “The History of Linguistics” in Mark Aronoff and Janie Rees-Miller (2001).
- Campbell, Lyle (2004) *Historical Linguistics*. Second Edition. Edinburgh University Press.
- Cipollone, Nick, Steven Hartman Keiser and Shravan Vasishth (eds.) (1998) *Language Files*. Seventh Edition. Ohio State University Press.
- Clackson, James (2007) *Indo-European Linguistics: An Introduction*. Cambridge University Press.
- Fennell, Barbara A. (2001) *A History of English: A Sociolinguistic Approach*. Blackwell Publishers.
- Fromkin, Victoria, Robert Rodman and Nina Hyams (2007) *An Introduction to Language*. Eighth Edition. Thomson Wadsworth.
- 藤井健夫(編) (1992) 『英語の世界 — 英語学とその関連領域 —』昭和堂。
- ギルマイスター, ハイナール (2000) 『英語史の基礎知識』小野 茂 (訳), 開文社出版。
- 郡司隆男, 西垣内泰介 (編著) (2004) 『ことばの科学ハンドブック』研究社。
- 長谷川瑞穂, 脇山 怜 (編著) (1998) 『英語総合研究 — 英語学への招待 — 改訂版』研究社出版。
- Hogg, Richard M. (1992) “Phonology and Morphology.” In Hogg (ed.) (1992).
- Hogg, Richard M. (ed.) (1992) *The Cambridge History of the English*

Language. Volume I: The Beginnings to 1066. Cambridge University Press.

神山孝夫 (2006) 『印欧祖語の母音組織』 大学教育出版.

亀井 孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) (1998) 『言語学大辞典セクション ヨーロッパの言語』 三省堂.

小泉 保 (1984) 『教養のための言語学コース』 大修館書店.

高津春繁 (1954) 『印欧比較文法』 岩波全書セクション, 岩波書店.

高津春繁 (1992) 『比較言語学入門』 岩波文庫, 青 676-1.

コツィオル, ヘルベルト (1977) 『英語史入門 <改訂版>』 小野 茂 (訳), 不死鳥英語学叢書, 南雲堂.

町田 健 他 (編著) (1997) 『言語学大問題集 163』 大修館書店.

松浪 有, 池上嘉彦, 今井邦彦 (編) (1983) 『大修館英語学事典』 大修館書店.

Lehmann, Winfred P. (2007) *A Reader in Nineteenth Century Historical Indo-European Linguists*. Online Edition. (<http://www.utexas.edu/cola/centers/lrc/books/readT.html>)

マルティネ, アンドレ (2003) 『「印欧人」のことは誌—比較言語学概説—』 言語学翻訳叢書第9巻, 神山孝夫 (訳), ひつじ書房.

McArthur, Tom (1992) *The Oxford Companion to the English Language*. Oxford University Press.

McMahon, April M. S. (1994) *Understanding Language Change*. Cambridge University Press.

Miller, George A. (1996) *The Science of Words*. Scientific American Library.

Mitchell, Bruce and Fred C. Robinson (1999) *A Guide to Old English*. Fifth Edition. Blackwell.

中島文雄 (1979) 『英語発達史 改訂版』 岩波全書 143. 岩波書店.

西光義弘 (編) (1997) 『日英語対照による英語学概論 教師用 (独習用) マニュアル』 くろしお出版.

- 大江孝男(1999)『新訂 言語学』放送大学教材 3706. 放送大学教育振興会.
- O'Grady, William D. and John Archibald (1996) *Contemporary Linguistic Analysis*. Fourth Edition. Addison Wesley Longman.
- 小野 捷 (1980)『英語史概説』成美堂.
- 小野 茂, 中尾俊夫 (1991)『英語史 I』英語学大系第 8 巻. 大修館書店.
- 大槻 博, 平嶋順子, 山本伸也 (2001)『英語の構造と背景』燃焼社.
- Pyles, Thomas and John Algeo (1993) *The Origins and Development of the English Language*. Fourth Edition. Harcourt Brace Javanovich College Publishers.
- Pullum, Geoffrey K. and Wiiliam A. Ladusaw (1996) *Phonetic Symbol Guide*. Second Edition. The University of Chicago Press.
- Robinson, Orrin W. (1997) *Old English and Its Closest Relatives: A Survey of the Earliest Germanic Languages*. Stanford University Press.
- 桜庭一郎 (1982)『英語史概要』篠崎書林.
- Stevick, Robert D. (1992) *A Firstbook of Old English*. Kenkyusha.
- 田中春美 (編) (1988)『現代言語学辞典』成美堂.
- 田中春美ほか (1982)『言語学演習』大修館書店.
- 田中春美ほか (1994)『入門ことばの科学』大修館書店.
- 寺澤芳雄 (1997)『英語語源辞典』研究社.
- Trask, Robert L. (2000) *The Dictionary of Historical and Comparative Linguistics*. Edinburgh University Press.
- Trask, Robert L. (2007) *Historical Linguistics*. 2nd edition. Hodder Arnold.
- 上野誠治(2001)「ヴェルネルの法則の記述に関して」『人文論集』第 20 号, 北海学園大学.
- 字賀治正朋 (2000)『英語史』現代の英語学シリーズ 8. 開拓社.
- 安井 泉 (1992)『音声学』現代の英語学シリーズ 2. 開拓社.
- 安井 稔 (編) (1996)『コンサイス英文法辞典』三省堂.

湯川恭敏 (1996) 『言語学』 ひつじ書房.

吉田和彦 (1996) 『言葉を復元する』 三省堂.

吉田和彦 (2005) 『比較言語学の視点』 大修館書店.